



門入利  
1274  
卷



文章撰格上 下稿

橋守部撰述



文を言を記す。言ハ心城述多き。言記れども、羨麗  
記を主。心を述えども通えず。要はされば是を此  
間みて許登婆と云。後世もやうて。許登も許登婆も一  
乃如くやう。とも。許登婆ハ本ト言花の義うて。言に文あ  
らず。言花トハ云し。他國も文章ニ書リ字の意も。  
言に文叶ひて心の章を主。と云なれハ。全圖一  
つある。故上代の文詞ハ常に口傳。云々に記し  
て。口語の外小於のつづれ文ありハ。言に花を咲せ。

心の雅藻を示せらるが故あり。中古よりて此雅藻を失ひてやうへれど。土佐日記。竹取伊勢宇都保等の古物語はさをうに口語のまゝに。記ちりを忘れてくられ。言の花をうちせうされ。言の並び句にきの上ふくべからむ。古き拾多く遺れ。それハ同紀氏の革ふくも却て古今集大井河行幸歌序文にあり。彼土佐日記の革法小考れす多かり。さへうるゝをとまつせまふハヤシタリ。あれど。やうすひは改まふ。口語の運ひを忘られ。故りかくらむ。又近芳とあくらむ。雅ひ言を失ひ。つゝけるるを記す。字音をとり

・  
み。俗ひ言をかきまつて。かくにたづらふくにくき。ちきく年極れ。けひよ春ふをきつゝ。如しくだらにくらましやうに。吾古學むくそりて。やうく古語の明うふ。或あるときまく。歌も文も千歳のちくふ術もめうやん。大きくおもひはく。かくころす。ゆきくちの文の句はくに心つくり。人ぢうさり。うさりに率は素つて。あくねうとあくねうを中古れ方にとくぬに。りうに言を傍まく。ゆきく。ゆきく。これと其はけか。俗文の運ひふくへとく。ゆきく。

3つに3つ4つと逐句ある字治大納言物語並好後然  
竹とリノモリミと俗文の様きる如ハ今にまくる  
3つ4つ5つ6つ7つ8つ9つ10つ11つ12つ13つ14つ  
以前小隨フテ中古體ふ擬りんゝも物語びう消息文  
かくらとハさるあめちくくき詞ふりうてハエ代  
小智ソル外ハア一故大さう人れ心すこもまへれと  
今上代の文ひ筆法を考ふる大むけ既小長歌換拾  
少引つまき長歌のつけふや相似て五七の調へあ  
きく風とあり故長歌のみにけり疊句疊疊疊  
疊對句隔對招應換響首尾章段譬喻序辭の十二種の拾

・  
かもの一篇のうへに開きもまく同一うふくす中に  
長歌ハ彼五七の調へ何うゆゑに枕詞多く文章ハ五七の  
數ふ拘らう故ふ枕詞をいとされど其物其事を貴く  
もくやくもくもくはりしんそくを實句異類光  
彩数量方邊枝葉此弓のあう所以下短哥撰拾小委一々りて等の語かくを  
以てちやうせら枕詞もくの内れ一つふうされハ短奇空  
文章のうへふく遷て彼疊疊疊等の文すりも右の  
異類光彩数量等の六種の飾詞を上とちよ多くて短致  
ハうくすく別ふきふきをもく例ふれハ疊句ハりうつ  
すくすく文章ハくすくきぬるねりもくと疊疊をつき

ふあるべし也故更小文章の範例を參る事左の如

實句ヨミ |

異類ヨミ ||

光彩ヨミ ▲

數量ヨミ △

方邊ヨミ ▽

枝葉ヨミ ▽

疊句ヨミ △

聯疊ヨミ △

隔疊ヨミ △

變疊ヨミ △

對句ヨミ □

隔對ヨミ □

招應ヨミ △

呼應ヨミ △

首尾ヨミ ▽

章段ヨミ ▽

右の内初の異類ヨミ △三類連用せら句もをヨミ 何り

されヨミ ▽ 如此上小。をくつれ三類連用

セラほどの句中左後ハ絶てヨミ 又短哥撰始中  
中虚ヨミ 名<sup>△</sup>ハ始く實句の例とすこの中小ニ  
類連用せらヨミ □ め此ヨミ セラ又歌ハ詞へ  
を重みせら被ふ實對云拾△ えされと文ハ下へ引連  
けてかくヨミ せらう體ヨミ おきどり此拾△ えられヨミ ▽  
カ此ヨミ セラう於此ヨミ おも云ヨミ ▽

凡此十八種を詠れあやの極ヨミ なきれの次に引不  
乃工代の文の章句に此簽のヨミ ふかヨミ ふかと見  
てちや詞のソリソリをもさく口語のまゝにソリソリとけ  
はおり得ヨミ 文をたゞゆくうすを知ヨミ うすを  
拾詞を以十八種の中少くべく多く是も實句の例と  
きのうす拾詞とも虛句もすら移すを以れと飾詞の  
うすを既小拾詞と云うふかヨミ ふかを引出

3本文を因の如く 同字類語を相互通じて あつてはるべく 疊  
對等の詞のあやを領ふ おもひこころえやう その中に同語  
同事の事ひづる又りつを 実ひへま 有ゆる おもひこころえ  
省て こゝにみけせきとあるありそをた 楽を知のこにて  
あらううちに其語小用あつてあつれい

古事記卷上 二十  
五丁

〔上津枝は八尺の匂總五百津の子もすみをうけ

中津枝子ハ足かみをとる所

下津枝子白和帶

青和帶をとる所これ程の物也

同本ニあひの日ろけと  
巣ア黒ス

ふみの命

ちのこやねの命

あめのうちうさぎ神御戸

あめうきの命

あめの日ろけをたまひふかく

あめのかく山めぐら葉をまわゆひ

あめの岩戸

あめのたまご

故やうはえを出雲國之肥の川工あらやうかふととくふ跡りき此をう

其川す著流きよろきくふまみをれ命其川す人すもと

あめを見ゆつてあめを

あめを

さくめど中すすきをちくあり

すくめど中すすきをちくあり

音が名ハ足名椎

妻が名ハ宇名椎

女う名ハ柳名田比賣

すまをほし申れ

すまをほし申れ

同ハ丁

【  
ちうふ 薩  
わい  
捨木  
わい  
杉  
あわい  
】

槍木  
おひ

檜木 ひい  
三  
水の香さ  
谷 八谷

峡ハシマ わくわく

その腰をまわる愁ひのつゝ血を流れぬと申す云々【さうをとあを  
三】  
湯津也柳 さくらの木 さくらの木の足名雄

手名椎の神

八鹽折之酒をかく  
塩を作り  
八門を作り

۷۶

さくらをゆ  
よしのふ酒船をあき

卷之三

八鹽折之酒也盛于畧下

神代紀卷下

高皇產靈尊マコトコトハシル、真床覆食マツコトカフと、天津彦國アマツヒコノクニ、光彦ヒカリヒコ火瓊杵カノツカミ、杵尊カミヤマ、小尊ヨリヤマ

七

丁十六

さへ奉りて

天磐戸を引ちて

天八重雲を押ねて

天弓を賜ひまづ

大伴連の遠祖 天忍ヨ命

末日部の遠祖 天穗津大糸目を帥て

さし小あゆ磐敷をもび

さもまぶつのミタマをくわせ

みもふあめのはらをくわせ

又八目のからかみをくわせ

又頭槌のつまきをはまつて

さうすあれ命のミタマをくわせて 日向の龍衣の高千穂のミタマをはまつて

やまと天深橋より下りて 下畧

古事記卷上 丁

天津日子番能通ニ藝命 天之石位ミタマをもれ天之八重多那雲ミタマをあ

わきてひづれ千別

千別て 天浮橋

浮橋より下りて 紫雲の日向の高千穂

のくしおけありまきこがあゆの日命

あら久米命二人

あゆの名ゆきをもひ

くわくわなうとくわせ

あつちゆをくわすら

あまかねてくまみえうひめ主へほくまうき

のく國をまの御前を見たりてのびく

朝日のくに

夕日のひる國をくそりまきとこうとうけ

底津石根宮柱太

高天原水桺高

畧

同六丁

綿津見大神誨へまつりく『此鉤』を『よそせよまん

のほりもさまに『此鉤』ハ於煩鉤

頭せんに『此鉤』ハ湏々鉤

宇流鉤うみて『おのれをもむ

下田をくま

下田をくま

下田をくま

三年うふみを『よそせよまくあく』

九

恨てそぞろは声ほんとを牛もあわり  
うれいしまへおほひともと牛もあわり

そぞろとあらう

まわらふあはせとまうをやうけあつても云々

顯宗紀室壽御詞

ほきうる室ほたる

ほきうるは『此家ほきうれ』御心れああふく 目  
取あらう『此家』御心れああふく  
取あらう『此家』御心れああふく  
取あらう『此家』御心れああふく  
取あらう『此家』御心れああふく

取あらう『此家』御心れああふく  
取あらう『此家』御心れああふく  
取あらう『此家』御心れああふく

出雲ハ

こひそりの牛ほのゆの種をそつよかみそき

うそく小毛やうそく『吾子等が』あらわし『かふの』  
角をうけたちゆり『うそく』酒あみねよあらひもかくひも  
たわらもさよ』御上とす『わえとくすも

祝詞式大祓詞

集侍 3 親まくら

三

あくすくち

百官人へうちもかくさくのせと宣る

『まく』の朝廷に仕奉る

領巾を伴のを

袖から伴のを

ゆきのあはれ伴のを

大刀はく伴のを

別本ニハ千件のと内ノ蓑ヲ省ク

伴のをの八十件のとけりて官へは奉る

人くのあやまちもん難の罪を今年のみを免れたり

『まく』の宣る

『高天原の神づま』

『大祓』

千本高をし『皇階祭』令と『高』『御舍』も(まく)

祓ひをすむ

清めをすむを諸まことと宣る

『高天原の神づま』

まこととすむをすむを諸まことと宣る

『高天原の神づま』

神集へふ集へまこと

神議りふ議まこと

吾『皇御孫命ハ』『豊葦原の水穂之國を安國と平々とす』  
事まこととまことと

御問ひよ問ひまこと

二三

詠掃ひよ掃ひよまひて

語問一磐根

樹根

草の片葉を語止て天之磐座

天之八重雲を穢威の千別

千別て

天くわくまうき

かくまくまうり四方の國中と大倭是高見之國を

安國と定まつて

下津磐根の宮柱太一き立テ

高天原より千木高ちて皇御孫之命の瑞に御舍ほりまつて

天の御陰

日の御蔭もかく坐て安國と平ゑまくわんぬちよ成せん天之益

人等う過犯くん難の罪事ハ天津罪と畦放

溝理  
通放  
頻蔚  
串刺  
生剥  
逆剥

天津罪と千別て

十二

戸のの罪を

國津罪と生

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

國津罪と生

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

死

天

天

天

天

天

天

天

天

天

蓋物

蓋物

蓋物

蓋物

蓋物

蓋物

蓋物

蓋物

蓋物

置

置

置

置

置

置

置

置

置

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

天

かく宣うは

天津神ハ 天の岩門を押開

天の岩門を押闖て  
天の八重雲を稜威の千別よ

**千別** **乙未** **國津神**

高山の末  
二  
矮山の末より上り坐て

高山のつぼ  
三

かくもくのめでたし  
皇御孫命のみとを始め

天下四方國々々罪々々

罪の書

科戸の風ひ天之火重雲をふきそなへ事の如く

草  
行  
聚

夕風のふきはう事の

**大清** 道光  
**大典** 席

彼方の繁木<sup>う</sup>本を<sup>ゆき</sup>漁の  
あふ

卷之三

清めゝまゝを高山の赤  
短山の赤もさう

早川の瀬

瀬城津比咩ミタマヒメ神大海原シマヘイ持出ハサフ

荒鹽アラソ

鹽乃ミタマ八百道ハチモロド

八鹽道之鹽ミタマ八百會ハチモロコシ座シテ速閑都スカムツ比咩ミタマ神持ミタマ參ミタマ

氣吹戸主ミタマ云神

根ミタマ國

氣吹戸主ミタマ云神

根ミタマ國

底ミタマ國ミタマ氣吹放ミタマちん

かく氣吹放ミタマちん

根ミタマ國

底ミタマ國ミタマ速佐湧良ミタマ比咩ミタマ神

持佐湧良ミタマ比ミタマムヒン

皇ミタマ命ミタマ止ミタマムミタマかくミタマかしてはミタマ高天原ミタマ耳振ミタマ章ミタマ馬牽ミタマ

始ミタマ天下ミタマ四方ミタマはミタマ今日ミタマ始ミタマ罪ミタマ

革ミタマ主ミタマ罪ミタマ高天原ミタマ耳振ミタマ章ミタマ馬牽ミタマ

立て今年の六月の晦ミタマ日ミタマの夕ミタマのミタマ大祓ミタマ

祓ミタマひミタマたすミタマい

清ミタマくミタマまミタマすミタマをミタマ諸ミタマきミタマりせミタマとミタマ室ミタマ

西用ミタマのト部等ミタマ大川道ミタマ持退ミタマきミタマ祓ミタマひミタマ却ミタマとミタマ室ミタマ

同出雲國造神賀詞カムヨウト

八十日日ハあ社も今日の生日也

乙日出雲國國造姓名恐

恐も申しまば

中畠 已命の和魂をハ忍鏡取託て倭大物主櫛庭玉命と称て大御和の神ぢりま

已命の御子阿遻須伎高孫乃命の御魂を葛木の鴨の神ぢりま

事代主命の御魂を宇奈提ふませ

賀伎奈流美命の御魂を飛鳥の神

皇御孫命の近守神と貢置て八百丹拝築宮をさすまく御せこくよ

親神魯伎

神魯美命の詔葉々く汝天穗比命ハをちみことのる長の大御母を

かまは小

八

トキハ

トキハ

トキハ

トキハ

トキハ

トキハ

トキハ

トキハ

神ぢりまは奉て朝日既豐崇のりり神の如也

神ぢりまは赤玉の大御白髮坐

青玉の水江玉の行相あやう御神と太公鳴國

まゆみ天皇命の長大御母を御横ノ廣りむ打堅め白赤馬の前足の丸

後足の丸

蹈らまうハ大宮の内外の御門柱を

工津石根の踏里

下津石根の踏凝へて 振きうるハ耳の『弥高』天下をあさふえ

まつまの白鷗の『生御調』つてもあさひあと『吉川』大志を多親尔

彼方の『古川』

此方の『古川』きづく生立くゆづくの『りやまえ』

みよみよ

湊、伎振遠止美乃水乃字『弥遠知』御をらま

ヤクシの大御鏡のあさをかへばくくらむるもすれめく

明御神の大

八鳥國を 天地

日月と共安らぐ

平らくきくもんゆのまく

御賀の神寶をもく持く 沖のわゆ

臣のわゆと恐

恐とも

天津つまゆの命

神ほまの『吉詞白』

申

同大殿祭詞

高天原の神ほまの『皇』がじつ神

高御座をもせて 天津壘の鏡剣を捧持賜ひと宣く

うづの御子『皇』御孫の命』うづの天津高御座をまく 天津日嗣を万千秋の

長秋よ大洲豊葦原の瑞徳國を

安國と平らしくさうらでと言ひて號ひて

『天津』御量たけうを事問一磐根

木根きのねたち

草の片葉かたばを言止て天あまを食くひく食國くに天下あま

『天津』日嗣ひつぐさうらにさうらすま命みことを今いま奥山おくやまの大峠おおとうげ小峠ことうげを本もと

齋さい部べの

齋さい斧のこをさうて代採だいさいて本もとを山神さんじんを以よて齋鉢さいぱくをさう

天あま御みや霸は

日ひ御みや霸はと造つくる造つくるまつれまつれ瑞みずゑののみちみちを汝屋船命うふねふみや天津あまつる御護ごご言いを

言いほ

齋柱さいちゆを立たて『皇』御孫みやこ命みことの

まくらひ白しろくらりまします『大宮地』底津磐そこついわ根ねの極きわ

下津綱しもつつな根ねの限かぎは虫むしの福ふくか

『高天原』青雲せいうんの靄けい極きわ

天あまの血け至いた飛鳥あすかの福ふくかほほかあらら柱ちゆ

析せき

牖ゆの錯さく動どうき鳴めい

事無なしく引結ひきへ葛くず日ひ緩ゆるく

取と普ふ多た草くさの噪さわきあく

御床みゆ都つ北きたののやきあく

伊豆いず都つ志しき伎うび

平ラク

安ラク 守ラム神の御名を白く 屋船久ニ能運命

屋船豊守氣姫命と 御名をハ称奉て

皇御孫命の御世を堅磐フ

常磐ヨリシテ持ム

ナリミタ

ナリミタ

齋玉作等ラ持ム

持キヨ處ヲ造リ仕奉レラ 端の父瓊のミヨモリカヘテモテモ

アミコムニ

アミコムニ

アミコムニ

アミコムニ

漏ルンタヒハ神直日命

大直日命 マツチ

兄直一

平ラク

安ラクモトウセモ白ニ

詞別テ

大宮賣命の前ヨ白く 大宮賣命と御名を申セラ 皇御孫命の同殿の

東ニ塞リ坐テ

マツカ

マツカ人ノモジラヒ 神等のイモラヒアルヒマツカ

ヤハマテ皇御孫命の御食

御食仕奉ラヒシカク伴の堵

タカヒロ伴の堵

言直一

タガ

手の躡

足の躡

親

あみくら

百官人たるを已うむきくおひに邪意ぢく

穢心

宮進

宮勤めふ

聞直一坐て奉

安<sub>シテ</sub>仕奉

坐すすて 大宮賣命と御名

此方とも言きちり言きなみとて長文響首句  
の比先のらひも又ほほみとて右歌ある此尾異  
心て彩例の千別さく例をくし右歌ある此尾異  
うのい別解あはくさくと丸の振る等警異  
例とて又わこう既とい態簽始さ等警異  
接威りあはく時短ひはらう実もと等章  
其高山例千わ工へ振らふへ句もと等章  
り狀簽病と別うのと括ひとてのう思の段  
ふを又附りある言もと云體部ふ具簽等  
固も高てれこと云ねいち用ふや足ハ  
て天高云章皆へ何のゆるうせ多簽  
其原山か云れ度<sub>タ</sub>用語らをあさく  
簽りちとりとて句の體語ふハ尼れ多ハ所  
の天とい又云良ふ如語ふ因全ハも省セ  
換某神へ光れ皆々れふとてふあけ  
るこへる彩と左のとて空替尼さうそれ  
年いて在部工の例詣賀實匂元<sub>ス</sub>大さをハ  
あへ云ふのみとほく匂と例ん爲われを招

此等ハ何の格々ハアム只古文の大うれしきと知セテ、  
凡そ古文を國せバソレの書も大うれしく、イモホシモアレル中古後  
ノアリて、ソラフメテモキセテ、ソラフモ、有等の筆に於ケテ、國  
乃め改あやむ外んすい、ソラフモ、先ニセテ、ソラフモ、左への修想  
ナラクを知へき也。他國を旅スカセアリ。

漢籍老子上篇

孔德之容。唯道是從。

道之為物。惟恍

惟惚。惚兮恍兮。

其中有象。恍兮惚兮。

其中有物。窈兮冥兮。

其中有精。其精甚真。

其中有信。自古及今。其名不去。

以閱萬物。萬物與我爲一。既已。

天下莫大於秋毫之末。而泰山爲小。  
莫壽乎蟬子。而彭祖爲夭。天地與我並生。而

且得有言乎。既已。爲一矣。

且得無言乎。一興言爲二。

二興一爲三。自此以往。巧歷不能得。而况其

莊子 齊物論

凡乎。故自無適有。以至於三。

而况自有適有乎。

無適烏因是已。云云

同養生主

吾生也。有涯<sup>呂</sup>而知也

無涯<sup>呂</sup>

以有涯<sup>呂</sup>而知者。

殆而已矣。為善無近名。

為惡無近刑。緣智以為姪。

可以保身。目

可以全生。

可以養親

可以盡年。庖丁為文惠君解牛。

手之所觸。

足之所履。

肩之所倚。

膝之所踦<sup>音倚</sup>砉然

騞然奏刀

騞然莫不中音。合於《桑林》之舞。乃中《絃首》之會。

文惠君曰。譖善哉。技蓋到此乎。

左傳 隱公元年

請京使居之。謂之京城大叔。祭仲曰。

都城過百雉國之害也。先王之制。

大都不過參國之一。

中五之一。

小九之一。今京不度。非制也。

君將不堪。公曰。姜氏欲之。焉辟害。

對曰。姜氏何厭之有。下如早為之所。無使

滋蔓。

蔓只難圖也。

同僖公四年

蔓草只猶不可除。况君之寵孽乎。云

齊侯以諸侯之師侵蔡。

蔡潰遂伐楚。

楚子使與師言曰

君子處北海。

寡人處南海。唯是風馬牛不相及也。不虞君之涉吾地也。

何故。管仲對曰。昔召庚公命我先君大公曰。五侯

九伯女實征

之。以夾輔周室。賜我先君履東至于海

西至于河

南至于穆陵。

北至于無棣。爾貢包茅不入。

王祭不共。無以縮酒。寡人是徵。昭王南征而不復。

寡人是問對曰貢之不入

寡君之罪也。敢不共給一昭王之不復

君其問諸水濱

記つけり。尼れハ悉くかやうをある。彼土を、古文を  
あつてめぐらす。と用ひけり。ゆゑに、

くわかもせのうよほひて口語のあつたるを

ありに言語の重得たる所を先也。中後の所のあつて  
布をげぬをあらう。彼も尼介を起し。尼れハ有まつて  
追きびのち学者の文を先一わざりへ

鈴屋集卷七

卷七

子が自れせり。かわくもせ。うそあつて。ひづせき  
ほづせきとまつて。ねくもくはくもく。うそいふくと  
はくく。教ふふたまほく。まよく。かくえ。あく  
ちうとうく。うす。傳を。まよく。まよく。まよく。  
おひく。おひく。ありがく。まよく。まよく。まよく  
だよく。やあんこ。あらう。うり。おもく。まよく  
あんりく。うきく。まよく。まよく。まよく。まよく  
ほじあく。うう。あもまよく。まよく。まよく。まよく

おひさまはあつた  
あらわすかげや  
うまきいとく  
きくうつみ  
ちくまくさん  
よしに尼さん  
あひあ  
ほり  
さるもうき  
さき  
ちうりゆひ  
かとさの  
ぬくろり  
のんの風  
せき  
ほく  
さくもか  
さくも  
すく  
すく  
すく

同卷六 五十五

卷之九

同文部八丁

中すゞめあひりみへまく  
内まことにほのきをもす  
あまゆきもとほのきをもす  
移りやうもまきりかよ  
はまくらうむりとよも

ひよる年月日をたまはゆるもひ日  
うみすみつまくらむてあらわへりて  
うきいふくらむてまくらむのまくら  
一ぐらむてはくらむてまくらむのまくら  
まくらも又まくらむてまくらむのまくら  
まくらをゆくキヨアモスミたまひて後わ  
アトモヒテのまくら  
ちもし、まくらにばくまくらをあま  
まれますとおろきふれあひひそとそきつ  
一まくらてたまくらぬまくらをあひ  
傳へゆんすをあひ、あもくとたまくら  
まくらて年月日をあひ、ちもせもあ  
さまくらてうきつ  
あもくとそきつ  
うきつをまくらゆきまくら  
されつ、あま  
うきまくらをあはる  
うきつをまくらてまくら

同文一十九

ももあはれに聞かれて  
そはれんのゆきありて身はほる  
たひるをまよおはしもと  
そをすみやをすみておはりもと  
そぞれて身ゆきのゆき  
もひるみるゆき  
えちよひけとくあ  
ゆきゆきゆきゆき  
せうて調へるゆき  
もよはきをりもつ綿をうき  
まんやうふくわ  
多御野の経やうそ  
りよおきちよゆき  
もよのうよひいたるもと

たまよあくびのひよすばらの書簡  
乃丈の軍事とやうそとて  
言辭もりつまことわく  
やられぬまゆう種をあき同  
よみよれひめれまこと  
うそすまうきがまゆうんを保文の運びのまゆうを取  
るもあくびのひよすばらの書簡の中に章句のもとを示せ  
きまよあくびのひよすばらの書簡

縣居翁家集卷四

うそかうりうむのうじもあらうてあんあらうむ

ちふまきをまつて國をもとめしもとを  
よきのまつてやうかく、只のまきのほく  
の國があるかうひのまつてうへてたまう國  
わくの城をあきらめうへてまきのま  
うのまつてうみまわんむけり  
うの郡の半のまち君のゆまな野のみ  
えひり、臣命のまちはの名前をすく  
うめれまうまく、まきの君  
まちたまうるの所とほく  
をせりとせんたまうおまくすくま  
をせりとせんたまうおまくすくま  
をせりとせんたまうおまくすくま

鈴屋集卷六 文二七丁

「今よりはまう骨がんまくをもて  
まもまのものあるか」あきらめたり  
はああきけからむるあさりてれども  
そむかのとせつもくわのゆとうせよ  
てたましもすくにをせやふくらむと  
ちひきまく佛ふくをせよやまく  
のえうじゆたんまく行くまのまく  
一まもまうまくまくばせまくうはまく  
たちゆくまくまくまくまくまくまく

あま里の久ちゆのゆきつすくは辛根のゑすすみふく  
さうあらうすまひせんみうきわくつもみ園のえあ  
くわうきれきわくままであくわくをうむまくは連連を  
のぞれちゆのみくらをひきあまもかくへ年の木

はくまみだつり楓の葉を  
ひそむるにあらわす  
ふきかくさりもうびとは楓のあれあす  
くもむちまくら  
同 十六丁

中華書局影印

卷之六

同五丁

相づれやうふるちもゆくらむやまのあて  
ちうとれをかきうへぬ風うき  
出でとけん人吹うてはれかく

りとおもてよきをもつておもひをせんとおもひをせん

人があれもまこと

琴後集文三五

そよぐみのむらむらしてよしのこめりともるれき  
月夜のすばりのすばりあくをくりくにゆくういふ  
をみのきへはるかにがのんじやさかくすくすく  
そよぎひよりひよりゆきのゆきのゆきのゆきのゆき  
そよぎひよりひよりゆきのゆきのゆきのゆきのゆき  
かくやきよあくまくまくまくまくまくまくまくまく  
そよぎひよりひよりゆきのゆきのゆきのゆきのゆき  
あくあんくわくわくわくわくわくわくわくわく  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
けくとおとおとおとおとおとおとおとおとおと  
おもきおもきおもきおもきおもきおもきおもきおもき

てうひちきむ

そよぎひよりひよりゆきのゆきのゆきのゆきのゆき  
すくすくゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆき  
何くわくわくゆきのゆきのゆきのゆきのゆきのゆき  
そよぎひよりひよりゆきのゆきのゆきのゆきのゆき  
そよぎひよりひよりゆきのゆきのゆきのゆきのゆき  
えきひよりひよりゆきのゆきのゆきのゆきのゆき

同文二三

そよぎひよりひよりゆきのゆきのゆきのゆきのゆき  
あくあくわくわくわくわくわくわくわくわく  
かくわくわくわくわくわくわくわくわくわく  
ひよりひよりひよりひよりひよりひよりひより

ひよりひよりひよりひよりひよりひよりひより

うまくかきあつた  
やがてあゆみ山をはあぐりやうてのうる  
タガノ尼やれ。山深き雪の事。被ふてそち  
もとまつてさる。指のやうに生むる汗  
だれ。尼はちよゆ風をうらやまうと  
もとまつてあらう。尼はうらやまうと  
あらゆてやけいすゑうとおもひぬ  
とまつてふとまきを引きうるをあらまきての文  
たゞ、ゆけまし。うきのうきをとてえり生む  
一筋の矢を二章。え書きも見えぬとこまく  
あらゆる事。又もるふ別れんよのう

土佐日記

蒙古文

例のまゝ皆悉く

年所よく多めあんづれ

上を下をもひあまく  
のよし

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九

S

人をもつてゐるが、そのうえ、

文の事も  
事の事も  
事の事も

かくはあひのまわらひ

之子也。故曰：「子之不孝，心有所謂也。」

卷之三

きつてきくてもうかくとふきのよしにかく  
はるかにまもりひいてたまぬ

あつてのあれ わくまくはくまく  
あくまくはくまくはくまくはくまく  
あくまくはくまくはくまくはくまく  
あくまくはくまくはくまくはくまく

まことにあ  
さんやえり

モニリスナムシカニ  
モニリスナムシカニ

卷之二

おまえさんも何せんおれもまじとさう

あくもあれどもあれはあはやんともあれゆり

卷之三

竹取物語 初丁

卷之三

名をいわゆるやつてゐる

あやめすてんまよゆめすひうら  
そふとれ三すくいひうれみじ

白きやくわくの毎々まんびれやふむくもくとお

子うづくめのき人ふくもくとおてあふぢて木

尼子の事は  
かくもあやしく  
りそやうに仕合へ  
育てられ、女めでたが  
りてせきやのまゝとし  
りきうべきほんまちどのか  
あらうとあひみち

あらわすはれのきよや

萬葉集卷之三

レターブル ある事 3 ホームを二室に

まつめのあそびをくわ  
くわ

男ハアマニシテモトモアリ

伊勢物語 初段

七  
卷之三

シカニテ

之多也。其後  
又復有  
之多也。

わくわくへふく里

卷之三

故人不以爲子也。故曰：「子」者，子孫也。

おまかでけよか  
きみのことをやうえをかくす  
や

はてあらゆる  
ちゆく

子  
之  
不  
居  
也  
不  
可  
謂  
不  
仁  
也

同二段

七  
かくにす  
レ

五。○乘馬者。○其人○亦○有○其○才○也○

之多令人不勝驚異

三  
九  
五  
七  
六  
四  
二  
八

のまえも

卷之三

同三段

卷之三

一條 矢野 さかの まちやま くわんじ  
今朝おけり

宇都保物語後編 初丁

也或都方捕左大弁 うそて 清原君あくろ

卷之三

五日、  
おはなやとひるを  
もじりながら

也  
是  
不  
可  
能  
的  
事  
情

وَلِلّٰهِ الْحُكْمُ وَالْحُكْمُ بِرِبِّ الْعٰالَمِينَ

のよきはんじゆをもと  
せ中臣のかみひるふをすてかきを引くをせぬを降  
ちゆくのあくまくのえちまつともももとひととく  
まよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよ  
生なま  
すよ一 天下の人のよしりうちよもよもよもよもよ  
すのよもよほよもよもよもよもよもよもよもよもよ

様を爲すと申す事と見てかくらるる  
「彦閑幸きにて幸まむをあらむ」  
おもひはたゞのあはやまくらるるがゆ  
きあ』

子をもつて移りておはなを教へたる  
きみにうかうかのまことにまわら  
くさきもと』

おまめのうちあるはよしとおまめ  
あらはりとく』

うひはまえうひとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

一とくひとくあまよ』

』

あくまくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

云々

おれとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

桐壺初四

りゆうの所はうつて女房のあらわしにひびきをもつてやる  
さういふ所はうつてやれて咲き立つてゐる

まつたけの花はうつてやる

おおきな花はうつてやる

おおきな花はうつてやる

おおきな花はうつてやる

多のあけはうつてやる

えりもくじくはうつてやる

おおきな花はうつてやる

おおきな花はうつてやる

宇都保といふよもうちわ尼山の條に相合  
せて近きうきゆくれをあつてと知りまし  
うの文書をかくや。すりと解し彼里もうほの邊  
りへもくらむるうへる文のあれどもいへ  
されと満たはゆくや。あはと諦めましも  
放すやちんほとくらむ。この文がくさるの  
鳥か。ひよそこれをせもあくわくする

ておもむかへる。かくのうへる  
うへる。かくのうへる。かくのうへる。

北風。北風。北風。北風。北風。北風。北風。  
天井。天井。天井。天井。天井。天井。天井。  
天井。天井。天井。天井。天井。天井。天井。  
天井。天井。天井。天井。天井。天井。天井。  
天井。天井。天井。天井。天井。天井。天井。  
天井。天井。天井。天井。天井。天井。天井。  
天井。天井。天井。天井。天井。天井。天井。

かくて古事記書紀のまづての文を推て察をよこす  
又漢文の方より寧きて考の言筆ひくになつまつれ  
多々りそつよ。古事記太朝臣安萬侶大人の自  
序より上古之時。言意並朴。敷文構句。於字即難。已因訓逐  
者。詞不逮心。全以音連者。事趣更長。是以今或一句之中  
文用音訓。云云といひて文字の多く費さざりて歎へ  
トモトモ稗田氏の習ひ誦せ。古語もれ意をえで  
漢文もすよ。紹和からく。一章句。陽の多くちくちく  
くちくとねえくまづてありよ。

天地初發之時。於高天原成神名。天之御中主神。次高  
御產巢日神。次神產巢日神。此三柱神者。並獨神成坐而。

隱身也。次國稚如浮脂而久羅下那洲多陀用幣流之時。  
如葦牙因崩騰之物而成神名字麻志阿斯訶備比古遜  
神。次天之常立神。此ニ柱神亦獨神成坐而隱身也。  
トモトモ一既之。リ。彼阿禮主の口誦す。あつ古語ハ

天地の初の時。高天原の神成す。

其成す多神の内名ハ。天之御中主神。

次ニ成す多神の内名。高天原の神成す。

けニ柱の神ハ。もとも福祐成す。ほうを傍や。

天地の初の時ハ。國稚く浮脂のウ。海月のウ。シキ。

あつよつよ。葦牙の。もえち。アラホ。

きよとみちひるをあふ因し、成すをる神の御名、うす行ひいろ  
の附。

四十五

次も成すをる神の御名、天之常立の附。

此う様神も、もとく舊神成さし、みあと傳まし。

トヤム、福一ノ人を事の長くあれと願ふ。近者の見方。

其降の意と云ふを、右の本文のウハ、カキシテサマモトモ

足えり、さて次の時代交代するに、改め此處より、一章

毎々、天地初發之時、云云といふのナリ。アリあつて  
シモノナハ。

同記

十三丁

故爾伊邪那岐命詔

十三

愛一き吾やふみ命や子の二きよか三月モ詔ありて

御枕

二

御足

三

『其石を中置てありもき』

『事産御引石』伊邪那美命申しもは

愛一き吾やふみ命からずす『すすの國人草』

二

千かくら

殺えんすゆひきこゝ伊邪那岐命詔

三

愛一き吾やふみ命すすめすすりあひや

二

千かくら

『ん詔』

四十六

同記二十

故、このより天安河を中と置て、時より天照大御神。まづ

**建**速瀬佐之男命の使佩をも

十拳劍を乞ひて三段より折て

まみれ吹きまきの<sup>ナ</sup>  
真霧<sup>キリ</sup>

亦名清江

**遠湏佐之男命**

天照大御神の左のみづく後である

アラムの食穀の五百津のミモザの瓊を乞ひ

二  
さくらみかみくわくうみの真霧マモが成カニ

○此段の事は有り難い。此等の頃より是迄て首肯  
する者多し。今此の如きのみかみても、多く通じ  
たるを以て、引つて、その首肯する。口の事と  
是を主文の句接を考へて、其を記述中より於是是以爾即爾即  
亦亦曰且乃る。如何に其の體を有するか。又告言白言

問曰、答曰、答告、誨告、議云、るとの教ハ此間の言叶漢文風を直セ  
アホリ トシルを今セテ文の表の全とには「ち語る」ヌヨト知  
アホリ引ス文 口口口口口けニ」と玉今セ引テテル

○○○○  
の「五人子」傳也

之

呂文定公集卷之三  
真務成子也  
序

卷之三

卷之二

えふかみでゆくまほの真務やせうねのア名、

の左九ノ序文を總合す

口口口口口口口口口口口口口口口

のうちへゆきもん

□□□□□□□□□□□□□□□□□□

まよひを吹きまほの 真空成也の事

出雲風土記上 新本四

意宇イリと名けアシテる爲ハシメ國引ハシメテけりハシメテ八束水臣津野命の詔ハシメテくハシメテ八雲立出雲國ハシメテ

狹布ヤヌのハク稚國ハクニ也ハシメテ

『初國ハクニちいまとハシメテくわせハシメテかね作ハシメテ縫ハシメテだと詔ハシメテすりて持食ハシメテき

三時ハシメテを

國ハシメテの餘ハシメテりあハシメテやハシメテれ

國ハシメテの餘ハシメテりあハシメテ詔ハシメテす

童女ハシメテの胸鉢ハシメテ

大魚ハシメテの鰐突ハシメテく

旗薄ハシメテほハシメテうハシメテ三握ハシメテの網ハシメテうらう

霜葛シロツバ

河舟のちまくニ國々未ニキ未隨セテ國ニアガラ豆の打続ありて百王

「杆築の御崎よりかくて固堅立。」は石見國也。

出雲國より現るる名、佐比賣山といふ。

又持引綱の長濱を北門より國を

國の餘りわやくれ  
童女の胸金よりて  
大奥の鰐突とけも

旗薄ほよろしく三捲の綱うぢかうて

霧

江戸の農業は、西表と玉米穀で興り多くも経由して畠の  
れり又北門農波の國を。

•

卷之三

西の食事はとてもよく、  
國の餘りあと詫み見て童女の胸鉢

大魚のまごつまわけ

卷之三

「霜月」  
河舟九十九國未よ國未と引未縫多國。守縫の打絶け

閑見國シマツノクニされあり又高志の都タカシノミチの三堵ミドリを

國の餘りあやま尼

旗薄ぼく わたく三様の綱くらかけ

霜黒鳥シロツバタカへすりふ

河舟カワボシ之ノよりく小國コトヒと引來縫ハタケ國ハタケ今穗ハタケの境ハタケ

持引ハタケ綱ハタケ御見島ミマシマれ

固堅ハタケ立ハタケ加志ハシ伯耆ハタケ國ハタケ大神ハタケ哉ハタケ

今者國ハタケ引說ハタケ詔ハタケすひて意宇社ハタケ御杖衝ハタケ意惠ハタケ詔ハタケすひて故

三意宇

う條ハタケかく章政ハタケ無ハタケ吾ハタケふまハタケの命ハタケやうらめハタケめくもハタケく  
くみハタケ小ハタケかみハタケ云ハタケ云ハタケあまハタケ今ハタケ縫ハタケ國ハタケの縫ハタケあくやハタケれ  
「國ハタケの縫ハタケ」ハタケ何ハタケ無ハタケと因ハタケ例ハタケありハタケ今ハタケの俚言ハタケが言  
孟ハタケ子ハタケの夏ハタケ小ハタケ風ハタケ上ハタケのをハタケりハタケうらハタケりハタケまハタケくハタケけハタケる  
故ハタケ古文ハタケの句法ハタケと別ハタケひつハタケきハタケむハタケの行ハタケくハタケれ

物ハタケ女ハタケ也ハタケ。又或ハタケいハタケかハタケみハタケる人の物語ハタケもハタケとそ  
うすハタケに筆記ハタケと見ハタケれ甚ハタケう即ハタケ古文ハタケの句法ハタケもハタケあくハタケう  
知ハタケる人ハタケ言ハタケうハタケうハタケうハタケんハタケと作ハタケうハタケひハタケ没ハタケけハタケしハタケえハタケうハタケ故ハタケ文  
考ハタケ成ハタケるハタケうハタケやハタケすハタケ筆ハタケのわハタケをハタケあくハタケてハタケ書ハタケべハタケ事ハタケよハタケめハタケれハタケてハタケあ  
ける。故ハタケ此ハタケ文ハタケ風ハタケ紀ハタケの文ハタケの下ハタケハハタケトハタケ小ハタケ委ハタケくハタケうハタケし記紀ハタケの  
文ハタケもハタケ一部ハタケすハタケうハタケ右ハタケのハタケまた錦ハタケれハタケ神語ハタケのハタケすハタケうハタケ  
漢字ハタケと筆記ハタケと見ハタケのちやハタケとあるハタケ先ハタケひハタケきハタケ祝ハタケ詞ハタケ此ハタケ聲ハタケも  
すハタケうハタケすハタケ又ハタケ其ハタケ章ハタケ句ハタケ獨ハタケ長ハタケうハタケすハタケ心ハタケにハタケよハタケしハタケをハタケ今  
そハタケうハタケに據ハタケてハタケ是ハタケの假ハタケうハタケ體ハタケの故ハタケすハタケ。

其一ハ飾り詞多き故也、其二ハ疊句多き故あり。  
其三ハ章段の多き故也、飾り詞多きも水穂國も云  
云々と、千五百丈長五百秋之水穂國も云々御饌と  
云々と、皇御孫命乃遠御膳乃長御膳も云々木  
を伐て、もとを遠山近山亦生立苗大木小木を  
本打斷、末刈切て持參来て、もとより類を以疊句多  
く持て云々と、御服者明妙、照妙、和妙、  
荒妙尔、云々と重ねて守て云々と、下す往す  
下を守り、上すゆくを守り、夜の守り、日の守り  
も、守り奉る、云々と重ねて、よき地も、宮を定めて、  
予を、吾宮者、朝日れ日向處、夕日の日隠れ處の龍

田の立野の小野も、吾宮者定奉て、吾前も云々と、重  
ねりも類ひる、章段も、段も云々と句もと云、  
前後も引て文もと、章句も傍も。』如斯、簽をほこ  
て即ち也、其も所以を、神代記、傳、神代記、  
真床覆食と云々とすつて、  
御墨化磬も外あけて、  
おれの車雲をも、ウケテ、天も、ウカシテある  
上の云改、一つは流て、覆食をもうつて、天も、ウカシテも磬も引か  
れ、天も、ウカシテも、八重雲を引いて、天も、ウカシテも

引け、又大祓詞

科戸の風の天の八重雲を吹ふる事の如

お、すみ方へて、手を扇風す風吹拂ふ。如く。  
大津エ、船を触り放つ船を放て大海を走る。如く。  
彼方の繁木う木と燒鶴の故縁りうち拂ふ。如く。

遺流罪ハ、ちーと云ふ

ちよそよ比喩も實はて、もくもく、すましと、まとつよ  
かうんと、文のちやよ、かうんと、ふくらむ。上の四つと、  
一つも統て、遺流罪いぢへて、まくひれ、凶殺をり、殺され  
た文ヨリ多く、准てて知り、中古の文も伊勢物語六、  
七、八、九、十、十一、十二、十三を、

〔 〕

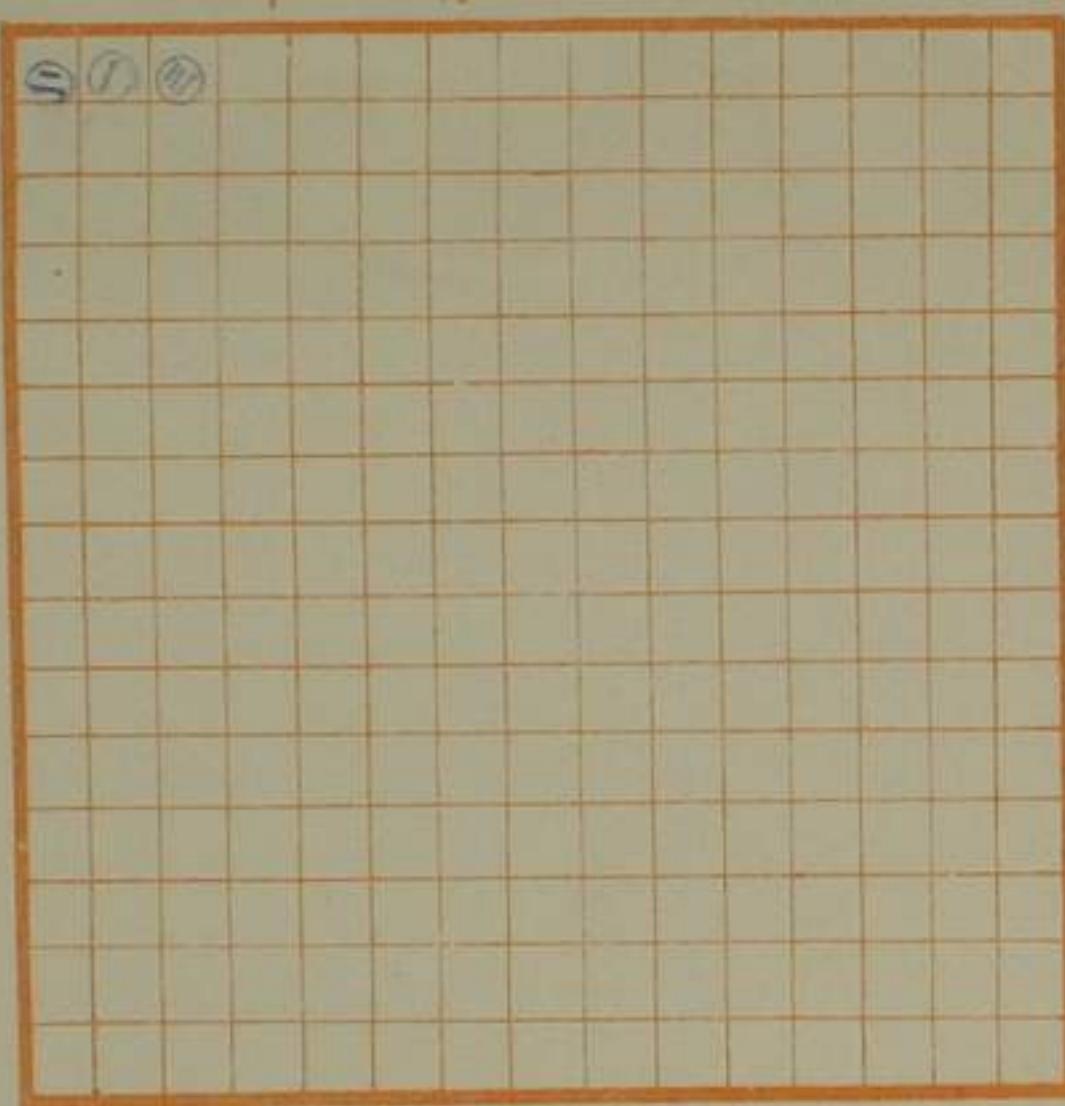
〔 〕

えこゑよ、えこゑよ、うけを、ゆまやきを、まわれを、寄  
子をよ、一つは信れ、又一殿

ま車とくとあまひて、

えこゑよ、えこゑよ、うけを、ゆまやきを、まわれを、寄  
んとあひて、かくさをまきて、かれどりぬ、行きの轍  
をも、あまうかく、右の三種ハ、古文のやうに、まくも  
かくも、長くたまうき、ゆまやき、まくも、れても、まくも、  
まくも、外が、まくも、まくも、彼御御、無く、章段奇の、  
かくも、まくも、一殿、まくも、相さんと、あく、一殿の

10



章々とちぎれ、ちぎれ、長き短き、ちぎれ、ちぎれ  
ちぎれ、ちぎれ、ちぎれ、ちぎれ、ちぎれ、ちぎれ、  
ちぎれ、ちぎれ、ちぎれ、ちぎれ、ちぎれ、ちぎれ、  
ちぎれ、ちぎれ、ちぎれ、ちぎれ、ちぎれ、ちぎれ、  
ちぎれ、ちぎれ、ちぎれ、ちぎれ、ちぎれ、ちぎれ、



